

## スタールの『コリンヌもしくはイタリア』に込められた神話的要素

## —「ラ・サールのニンフ（妖精）」との関連性から—

Mythical characters in Staël's *Corinne or Italy*  
—Relationship with “La Saal's Nymph”—

武田 千夏<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学比較文化学部

Chinatsu Takeda<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：ジェルメン・ド・スタール，コリンヌもしくはイタリア，神話，妖精，ローレライ

Key words: Germaine de Staël, Corinne ou Italy, Myth, Nymph, Loreley

## 抄録

スタールの小説『コリンヌもしくはイタリア』(*Corinne ou de l'Italie*, 1807)が今日欧米を中心に再評価される理由は何か。本論文ではこの小説に登場する神話的要素に着目しつつこの問いに答える。先行研究は主にコリンヌを「古代ローマのシュビラ」と結びつけて解釈するがそれはあくまでも女主人公のキャラクター構成に関するものであり、この神話的要素によってこの小説の現代性について読み取ることはできないことを指摘する。本論文はスタール自身が『ドイツについて』(*De l'Allemagne*, 1813)で分析の対象としたドイツ・オペラの『ラ・サールのニンフ』をあらためて取り上げ、スタールが中世ドイツに由来する「ローレライ」を19世紀初頭に流行したこのドイツ・オペラの内容に準拠して近代的に解釈し自身の小説に取り入れた具体的経緯について明らかにする。その結果「コリンヌ」は「特別な才能を持った女性の自由と結婚の間のジレンマ」という極めて近代的な内容を持つ神話の女主人公となり、今日ジェンダーの視点からこの小説が再び注目される直接的理由となった。

## 1. はじめに

小説『コリンヌもしくはイタリア』(*Corinne, ou l'Italie*, 1807)は今日ジェルメンヌ・ド・スタール(Germaine de Staël)の数ある作品の代表作として知られている。この小説とその後出版された『ドイツについて』(*De l'Allemagne*, 1813)によって、スタールはフランスにロマン主義を導入するとともに「スコット、バイロン、ゲーテ」とともにヨーロッパ・ロマン主義を牽引した作家の一人となった。<sup>1</sup>

『コリンヌもしくはイタリア』が出版される以前から、スタールはすでに女流作家としての地位を確立させつつあった。そのため出版社 Nicolle はこの小説の成功を確信し、スタールに7,200フランという破格の契約金を支払ったほどである。<sup>2</sup>

そしてこの小説は当初の予想をさらに超える成功を収めた。初版以来40年もの間『コリンヌもしくはイタリア』はフランス語のみで32版も再版された。また英語、ドイツ語などにも翻訳され、19世紀半ばまでのヨーロッパの文学、芸術に多大な影響を及ぼした。しかしながらフランスで第二共和政が第二帝政に替わられる頃にはこの小説の人気も陰りを見せ、19世紀後半に入ると小説を特徴づけた「感情の高ぶり」は俄かに「時代錯誤」とみなされるようになった。<sup>3</sup>

20世紀に入ってもこの小説はフランス人の記憶から遠のいていた。第二次世界大戦後、フランスの知的シーンはマルクス主義思想が自由主義思想を圧巻したが、ジェンダーへの関心は自由主義思想と同様かそれ以上に薄かった。またこの時代の

フランス史研究において帝政期はナポレオンを中心としたフランス史こそ注目されたが、ロマン主義文学はあいかわらず軽視された。<sup>4</sup>そのためプロテスタント、リベラル、女性そしてロマン主義派の作家としてスタールが本国フランスで日の目を見ることはなかった。

ところが1970年代以降、マルクス主義思想の後退と修正主義の台頭そして第二波フェミニズムの影響によって、フランスのみならず広く欧米でスタールに対する学術的関心が俄かに高まっていった。<sup>5</sup>フランスでは『コリンヌもしくはイタリア』が1979年に再版され、その後英語版が1987年に続いた。<sup>6</sup>佐藤夏生氏訳による日本語版『コリンヌ：美しきイタリアの物語』も1997年に出版された。<sup>7</sup>フランス政府は1999年にフランス語教師認定の試験(agrégation)のプログラムに『コリンヌもしくはイタリア』を含め、スタールは名実ともにフランスの文学史の表舞台に再び咲いた。<sup>8</sup>その結果スタールの死後200年経った今日フランス、アメリカなどを中心に『コリンヌもしくはイタリア』はかつてないほどの注目を浴びている。

200年以上も前に書かれた『コリンヌもしくはイタリア』が今日再び世界的に注目されるようになったのは、その小説としての価値以上に近代市民社会における女性の生きづらさ、というテーマ性によるものであると思われる。本論文では女主人公コリンヌにまつわる神話的要素に着目しつつ『コリンヌもしくはイタリア』の極めて現代的なインプリケーションの源について明らかにする。

## 2. 『コリンヌもしくはイタリア』のあらすじ

本題に入る前にまず小説のあらすじを紹介する。<sup>9</sup>『コリンヌもしくはイタリア』は20部から構成された長編小説である。小説の舞台は主に1794年から1803年までのイタリア、イギリスであるが、ところどころに革命フランスやナポレオン帝政についてもほのめかされている。

1794年当時スコットランド出身の青年貴族ネルヴィル卿オズワルドは深い悲しみを抱えていた。それは自分が革命フランスへ赴いた間に本国で父親が亡くなったため父の死に際に立ち会うことができなかったという罪悪感からくるものだった。そのため彼は癒しを求めてイタリアへ旅立った。ローマに到着した翌日、オズワルドは偶然「詩人、作家、即興詩人、ローマ随一の美女」として知ら

れるコリンヌが、カピトリーノの丘で女性であるのにもかかわらず桂冠詩人としてローマ市民の賞賛を一手に浴びるシーンに出くわした。二人は一言二言言葉を交わしたが、この時コリンヌはオズワルドに宿命的な愛を感じる一方、オズワルドもコリンヌに一目惚れした。

オズワルドはコリンヌの完璧な英語に驚くと同時に、コリンヌの秘密めいた過去や神秘的な雰囲気戸惑った。オズワルドは、コリンヌがオズワルドと同じイギリスの貴族階級出身の父親とイタリア人の母親を持ついわゆるハーフだったことを後に知った。またオズワルドの父が幼い頃のコリンヌに会ったことがあり、才気煥発なゆえに息子との結婚に反対し、良妻賢母型の異母姉妹のルシルがオズワルドの許嫁になった、という経緯についても後にコリンヌから直接知らされた。

21歳になると、コリンヌは女性の生き方が家庭に限定されたイギリスの上流社会で良妻賢母として生きていく未来像に嫌気がさした。そして女性でも芸術活動が許されライフスタイルの自由も享受でき、かつ15歳まで住み慣れたイタリアへと舞い戻った。そうした自由の代償として、コリンヌはスコットランド人の異母からは金輪際エッジャモンドという姓を名乗ることを禁じられた。女性が姓を持たず名前のみで生きていく、というのは尋常なことではなかった。議会制度を確立し一足早く近代市民社会を築いたイギリスにおいて、その土台となる家父長制に依存せざるをえない女性が拠り所となる社会的立場を失うことを意味したからである。

イタリア到着後、コリンヌは古代ローマの女流詩人の名前に由来する「コリンヌ」を名乗り自らが望んだ通り即興詩人として活躍した。そしてそんな状況の中コリンヌとオズワルドは思わぬ形で出会い相思相愛となった。

オズワルドはコリンヌとの結婚の準備をすべく一時的にスコットランドへ舞い戻った。しかし彼はイギリスの社会慣習に抗えず、結局ルシルと結婚してしまう。それからインド諸島で4年間暮らした後、オズワルドは妻と娘を連れて再度イタリアを訪問し、オズワルドに見捨てられて生きる希望を失ったコリンヌとの再会を果たした。すでに健康を害していたコリンヌはオズワルドの許可を得て、彼とルシルの一人娘であるジュリエットに音楽、イタリア語、そのほかの芸事を仕込んだ。

やがてコリンヌは衰弱して亡くなったが、黒い瞳と髪を持って表現が豊かで才気煥発なジュリエットはコリンヌを彷彿させた。

### 3. コリンヌと「古代ローマのシュビラ」

次に小説『コリンヌもしくはイタリア』の神話的要素について考察する。その前に「神話」についてあらかじめ定義づけておく。

国語辞典『大辞泉』によれば、神話とは「宇宙・人間・動植物・文化などの起源・想像などを始めとする自然・社会現象や超自然的存在を神や英雄などと関連させて説く説話」を意味する。日本にはもちろん日本固有の神話が存在するが、日本語で神話という言葉が一般に使われるようになったのは「神話」(mythologie, mythology)という概念が欧米から導入された明治時代以後のことだった。

‘mythologie’という言葉が最初に使われたのは英国ではなく欧州大陸だった。17世紀フランスの辞書 *Dictionnaire universel de Furetière* によれば ‘mythologie’とは「古代の素晴らしい神々と英雄に関する話と、彼らの偽りの宗教、その寓話および変容にまつわる謎についての説明」と定義づけられている。またこの言葉はギリシャ語の「寓話についての言説」に由来すると説明されている。<sup>10</sup> これらから欧州においてかつて神話は古代のギリシャ神話に限定されていたことが理解される。

しかし神話の意味はフランス革命後ドイツで一転した。ドイツでは抽象的、哲学的な特徴を持つフランス革命に対抗する形で一民族を主体とするナショナリズムの概念が誕生した。それは当時国民を意味する言葉が Nation から Volk へと変化していった点に象徴されるが、それを「我々」意識と言い換えることもできよう。こうして中世以来統一された国民文化を持たずに来たドイツではフランス革命を契機に自国のナショナリズムを模索する機運が生まれた。そこで注目されたのが北欧やインドに由来する神話だった。

その結果フランス革命への反動としてドイツ語の mythologie は古代ギリシャ・ローマのみではなく先史時代から中世由来の伝説までを幅広く含むこととなった。ドイツ語歴史事典(Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache)によれば18世紀末から19世紀初頭にかけて神話の意味が変容し「悪魔、神、英雄についての伝説によって先史時代以来の一民族の伝統」を意味するようになった。

一方同時期のドイツに誕生したロマン主義のロマンとは中世の物語や神話を意味する Romances を語源しており、それは新しい「神話」の定義においても中世ヨーロッパが重要な役割を担うことを意味した。

その後ヨーロッパ大陸の影響を受けてドイツ語による神話の意味変容は英語にも影響を及ぼした。*Oxford English Dictionary* によれば英語に新語 mythe という言葉が誕生したのは1830年代のことだった。それはドイツ語同様、国民性やナショナリズムなどの概念と結びついており一民族の神話という文脈で使われた。現代日本の言葉、神話もこのドイツロマン主義以来の神話の考え方を踏襲していることを考慮すれば、世紀転換期のドイツロマン主義はその後の人類史に多大な影響を及ぼしたことが理解されよう。<sup>11</sup>

スタールはこのドイツロマン主義をフランスに紹介した初めての作家として知られる。その役割を担ったのが『ドイツについて』だったがそれ以前に出版された『コリンヌもしくはイタリア』にもドイツロマン主義の影響が所々に垣間見られる。例えばこの小説の中でスタールはフランス語の文脈において初めてイギリス人、フランス人、ドイツ人、イタリア人などの「国民性」に言及している。またこの小説には絵画、遺産、彫刻などを媒体としたキリスト教や古代ギリシャや中世の民間伝承に由来する複数の神話的要素も読み取れる。<sup>12</sup>

では『コリンヌもしくはイタリア』に込められた神話的要素とは何か。ここでまず思い浮かぶのは、フランスの新古典主義派の代表的画家であるフランソワ・ジュラールが描いた『ミゼーノ岬のコリンヌ』(1819-1822)の絵画イメージであろう。





図 1. Par François Gérard — Œuvre appartenant au Musée des Beaux-Arts de Lyon, CC BY-SA 3.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=32032165>

『コリンヌもしくはイタリア』の先行研究はこの絵画の文化的伝統を受け継いでコリンヌを古代ローマのシュビラと関連づけて論じている。<sup>13</sup> スタールが当初近世、近代イタリアについての知識を持たず、彼女のイタリアのイメージがほぼ古代ヨーロッパ文明に限定されていたことを考慮すれば、コリンヌが古代ローマの神話的要素に由来するという仮説は驚くにあたらない。<sup>14</sup>

さらにこの仮説には根拠もある。スタールのイタリア旅行日記には、ボルゲーゼ広場(Palazzo Borghese)において「ドメニキーノによる最も美しいシュビラ、彼女の髪はターバンで束ねられ、赤いショールをまとっている」とメモ書きが残されている。<sup>15</sup> そしてこのメモは小説の中で次のシーンと化した。

「彼女(コリンヌ)はドメニキーノのシュビラのように装い、頭にはインドのショールが巻かれ、極めて美しい黒髪がそのショール位入り混じっていた。

ドレスは白で、胸の下で青いドレープが結ばれていた。彼女の衣装は一風変わっているとはいえ、わざとらしさをそこに見出せるほど、普通の装い方から外れているわけではなかった。」<sup>16</sup>

スタール研究の大家の故シモン・バレイエ女史は17世紀イタリアのバロック画家、ドメニキーノが描いた古代ローマのシュビラのイメージを膨らませて、コリンヌが「アポロ的な存在であり」「女預言者シュビラであると同時に靈感を受けた女祭祀であり、詩人にして批評家、さらに他のあらゆる芸術の表現方法によって自己表現することができる」存在だったと書いている。<sup>17</sup> バレイエ女史に続いて、日本でも村田氏や小林氏らがコリンヌのイメージがシュビラに由来することを強調している。

例えば、小説に登場する絵画を中心に独自の解釈を施した村田氏は次のように説明している。

「絵画、音楽、演劇、舞踏とすべての芸術に秀で、靈感に突き動かされて即興詩を作り出すコリンヌがイタリアの輝く太陽の光の下、誇らかに進んでいく姿は、シュビラそのものであった。・・・シュビラとコリンヌの相関関係はさらに密接で、彼女のティヴォリの別荘はテヴェローネの滝の下に建ち、その真向かいの山の頂にはシュビラの神殿があった」<sup>18</sup>

村田氏はこれらの神話的イメージをコリンヌの宗教観に結びつけて論じている。<sup>19</sup> つまり古代の異教の精神は18世紀末のイタリアでも健在であり、近代の即興詩人、女流芸術家としてのコリンヌはシュビラのように「自由な環境の中ではじめて神から靈感を受け、その高揚感のうちに優れた作品を生み出した」<sup>20</sup>

この解釈によれば、シュビラとコリンヌを宗教的に結びつけたのは当時神秘主義に関心を持ったスタールがアントゥージアズム(enthusiasme)と呼んだ「魂の高まり」「高揚感」「熱情」「熱狂」などの靈感とも呼べる感情だった。<sup>21</sup> しかしながら小説後半においてオズワルドへの恋愛感情に囚われてしまったコリンヌはもはや万人のための靈感を失ってしまったという。<sup>22</sup> 最終的に結婚が成就しなかったコリンヌは健康を害し死する。この時点で村田氏は「保守的な社会規範に押しつぶされたコリンヌ」は女性でありながら「キリストの受難」のイメージを帯びていったと結論づけた。<sup>23</sup>

古代ギリシャの女性詩人「コリンヌ」と同じ名をもち、シュビラの巫女に匹敵する靈感を持つとされるコリンヌは同時に南ヨーロッパ特有のカトリックの優美さを兼ね備えていた。つまり村田氏は古代ローマを主体とした神話的要素からコリンヌの宗教上のダブルアイデンティティーの存在を浮き彫りにした。それはコリンヌの父がイギリス人だったことと相まって、統一ヨーロッパ的象徴としてのコリンヌのイメージに一役買っている。<sup>24</sup> このように先行研究は古代ローマのシュビラのイメージを強調することによって、コリンヌという女主人公の外的美や宗教などを含めた古代ローマ以来の神話的要素を強調している。

本論文はそうした見方はスタール自身の古代ローマ観によっても補強されると考える。スタールは『社会制度との関係において考察した文学について』(De la littérature dans son rapport avec les institutions sociales, 1800)においてある時代の文学の傾向はその時代の社会状況と相対的な関わりを持つ、という独自の視点に立ったヨーロッパ文学史を展開させた。そしてフランス革命後のフランス社会は絶対王政とは異なる、自由な文学を新たに作り出していくべきである、と説いた。

ここではスタールの独自の歴史的パースペクティブにおける古代ヨーロッパ文明の立ち位置に注目したい。スタールによれば近代人は古代人が生み出した「想像」を主体とした美術や詩を凌駕することはできず、近代人が過去よりも進歩した内容の文学を残すことができたとしたなら、それは哲学を含め思想を主体とした文学に限られると考えた。<sup>25</sup> スタールはとりわけ古代ギリシャ・ローマ時代の想像力に溢れた美術の外観美がその後のヨーロッパ史とは別格の存在であることを強調した。

だからと言ってスタールは古代ヨーロッパ文明の外観美を全面的に讃えたわけではなかった。彼女は外見的な美が「人々を精神的に感化する側面と腐敗させる側面」という相矛盾した特徴を持つことを指摘し、自由でない政体が美によって国民を従わせる危険性について何度も小説の中で示唆しているからである。<sup>26</sup> この見方によってスタールは古代美術を重視したナポレオンへの警戒心を露わにした。同時にスタールの見解には、ナポレオンの出身地コルシカとあいまって南ヨーロッパに対する北ヨーロッパの優勢性を読み取ることも

できるだろう。<sup>27</sup>

それ以外にもコリンヌとシュビラの関係性には不明瞭さが残る。そもそも古代ローマには10人ほどのシュビラが存在したと言われ、小説ではティボリについての叙述があるにしても、コリンヌがどのシュビラに匹敵したのかについては明らかではない。今日カピタリーノ博物館に展示されているドメニキーノの絵画『シュビラ』の解説には「近世イタリアでは予知占いをする女性が古代シュビラに例えられていた」との解説が書かれている。この解釈によれば、ドメニキーノの絵のシュビラとは古代ローマのシュビラの名のもとに古代ではなく近世の女性を描いたと解釈しうる。

また巫女である古代ローマのシュビラと近代ヨーロッパの即興詩人であるコリンヌがもつ靈感(アントゥージアズム)とは果たして本当に同じ感情だったのだろうかという疑問も湧く。ちなみに、スタールのアントゥージアズムを古代ギリシャのものとは厳然と区別し、スタールのアントゥージアズムの感情にはカント哲学の影響があったと説明する研究者もいる。<sup>28</sup> 確かに小説全体を見渡した時コリンヌは感情と同じぐらい理性を働かせて文学、宗教など多様なトピックについて議論しているが、このようなことは19世紀初頭において例外的だったが、古代ローマの女性にはあり得なかっただろう。

本節では神話的要素として古代ローマのシュビラが小説に対して果たした積極的な役割について主に先行研究を辿りつつ紹介した。そしてシュビラのイメージは神秘的で即興詩の才能を持ち古代宗教とカトリック教の影響を同時に受けた、というコリンヌのキャラクター形成に大きく貢献したという仮説を紹介した。同時に靈感という比喩の視点から見た時、古代のシュビラと近代理性に目覚めたコリンヌを並行的に論じるのには若干問題があることを指摘した。

最後に古代ローマのシュビラがこの小説のストーリー展開にまったく寄与していないという事実もこの神話的要素の小説への貢献が限定的であることを示唆しているように思われる。つまり小説のテーマである「非凡な知性や才能を持つ女性は社会から追放され、女性として愛や結婚を望むことができない」という極めて現代的なテーマに対して古代ローマのシュビラは何ら関連性を持たない。

#### 4. コリンヌと「ラ・サアルのニンフ（妖精）」

コリンヌは並外れて美しい外見のみでなく、同じく並み外れた知性、才能などの内面性も兼ね備えていた。しかしこれは当時の社会通念にそぐわなかった。議会制度がすでに存在するイギリスやフランスにおいて社会通念に多大な影響を与えたのが世論だった。世論は近代市民社会を象徴する存在であったがそれは同時に諸刃の剣的な特徴を持ち合わせていた。なぜなら議会制度の下支えとして市民社会の自由を保障する一方で、性別役割分担制度の視点から見た場合には、女性に対しては自由を容認せず良妻賢母の役割を担わせるイデオロギー装置として機能したからである。

この世論ゆえ、自分たちの性に与えられたしるべき社会的地位から外れてしまったスタールやコリンヌのような例外的な女性にとって近代社会に快適な社会的立場を見出すことなど不可能だった。それが小説においてコリンヌに苗字がなかったという状況に端的に反映されている。スタールはコリンヌの状態を「インドのパリア（カースト制度における最下層の不可触民）」に相当するとも書いている。<sup>29</sup>

その結果、コリンヌの外観ではなく社会的立場に注目した際、あたかも統一欧州を表象していたかのような完全無欠なコリンヌ像はにわかにマイナスのイメージを帯び、小説の後半部分の悲劇的な展開を後押ししていく。最終的にコリンヌは愛や結婚を成就できず、自慢とした即興詩の才能すら枯渇し、自分を捨てた男性に対して怨念を抱いて亡くなった。ではコリンヌの内的葛藤の源となる彼女の社会的立場の視点に立った場合、そこにはどんな神話的要素を見出すことができるだろうか。

この問いに答えるために、スタールが『コリンヌもしくはイタリア』を書いたきっかけについて思い起したい。スタールは1803年にナポレオンからパリ滞在を禁じられた。その結果当時スタールの愛人で政治的盟友だったバンジャマン・コンスタンとともに同年10月にドイツへ旅立った。翌年の2月1日にベルリンのワイマール劇場で、スタールは『ラ・サアルのニンフ』というオペラを鑑賞した。その内容とは、一人の騎士が水の精と愛し合ったが、騎士は結局不死身の妖精ではなく特別な才覚や特徴をもたない平凡な女性を結婚相手に選ぶ、というものだった。このオペラを直接のきっかけとして、スタールは美しいが優れた才能や

知性を持つゆえに万人とは異なる人生を運命づけられたコリンヌと、最終的には彼女を捨て、良妻賢母的な平凡な女性と結婚するオズワルドとのラブストーリーを思いついた。この点についてはすでに先行研究でも指摘されている。<sup>30</sup> スタールの書簡によれば鑑賞の翌日彼女は父親であるネッケルに手紙をしたため「昨日大変にすばらしい想像とおとぎ話のオペラを見て、新たな小説のプロットが浮かびました」と書き送っている。<sup>31</sup>

今日完全に忘れ去られてしまった『ラ・サアルのニンフ』は19世紀初頭のドイツで大人気を博したオペラだった。<sup>32</sup> このオペラの由来は中世ドイツの民間伝承である「ローレライ」だった。ローレライとは古ドイツ語の Luen(見る、潜む)と ley(岩)に由来するが、実在するこの岩山では従来船の事故が多かった。それが「岩山にたたずむ美しい少女が先頭を魅惑し、舟が川の渦の中に飲み込まれてしまう」という伝承に転じ、ローレライ伝説となった。<sup>33</sup> フリードリヒ・フーケ (La Motte Fouqué) はこの伝承をもとに『ウンディーネ』(Die Saalnice, 1811) を書いた。さらに日本でもよく知られているアンデルセンの『人魚姫』も「ローレライ」を題材にしている。スタールも世紀転換期のドイツで話題となったこの「ラ・サアルのニンフ」という神話的要素に注目した。ではスタールはどの「ラ・サアルのニンフ」像を取り上げそれをどのようにして小説のストーリー展開に利用したのか。

この問いの答えはスタールのドイツの文化と文芸についての評論『ドイツについて』にある。彼女はこのドイツ・オペラを鑑賞した際にメモを残したがその一部が数年後この著作中の「ラ・サアルのニンフ」(第二部の文学と芸術の第26章の「喜劇」)に取り入れられたからである。<sup>34</sup>

スタールは『ドイツについて』の中で19世紀初頭のドイツ人流の喜劇について次のように説明している。

「ドイツ人は喜劇の中に、古代人や近代人がヨーロッパ各地で発案したものを取り込もうとしている。彼ら流の喜劇の中に真に国民的(ナショナル)な性質があるとすれば、それは庶民的な道化話か、冗談に魔法を加えた内容の劇であろう。」<sup>35</sup>



スタールは「冗談に魔法を加えた」劇の一例として、ワイマール劇場で彼女自身が見た『ラ・サアルのニンフ』を挙げた。<sup>36</sup>スタールはこの水の精がベルリンでは「ラ・サアルのニンフ(妖精)」, ウィーンでは「ドニューブのニンフ」と呼ばれていると説明したが、両者がもともとドイツに古くから伝わるローレライの神話にさかのぼることについて言及していない。つまり彼女の著作の直接的ヒントとなったのはあくまでもドイツ・オペラの『ラ・サアルのニンフ』だったのであろう。スタールはこのオペラ作品について次のように説明している。

「騎士が妖精と恋に陥ったが、彼は状況ゆえ妖精と別れる運命となった。そしてそれからずっと経ってから申し分ない人 (excellente personne) を妻に迎え入れた。その女性には想像力、物の考え方の両面において何の魅力もなかった。それにもかかわらず騎士はこの状況に即座に適合できた。妻が平凡だったことは、(同じように平凡だった) 彼にはしごく当たり前のことだった。なぜなら優れた魂と優れたエスプリ(知性)が重なった時にもっとも自然に近づく、という事実について知る人はほとんどいないからである。」<sup>37</sup>

ローレライの伝承は単なる「魔法を持ったニンフ」だったが、スタールはオペラの『ラ・サアルのニンフ』の中に「魔法」とともに「優れた魂と優れたエスプリ(知性)」を持ったニンフを見た。そしてそこに26歳で芸術、歴史、文学の知識を持ち、3つの言語を操るなどの才能を持ち、「とてもチャーミングで女性的な魅力も兼ね備え、広く賞賛された」<sup>38</sup> コリヌ像を重ね合わせた。同時に恋愛、結婚が平均的な上層階級や中産階級の女性のようにうまくいかないとわかった時、コリヌも自分に宿った「魔法」をもてあました。そして最後にコリヌの心の闇の部分が次第に頭をもたげた。その結果スタールによる「ラ・サアルのニンフ」像は以下の通りとなった。

「妖精は騎士のことを忘れることが

できず、魔法によって彼につきまとう。騎士が家庭に落ち着こうとするたびに、彼女は魔法によって彼の関心を引くことに成功し、彼らの過去の愛について思い出させるようにしむけるのである。」<sup>39</sup>

あくまでも徳を表象する古代ローマの巫女のシュビラとは対照的に、ドイツ・オペラの『ラ・サアルのニンフ』の視点から見たコリヌは極めて人間的な存在だった。彼女は、自分が裏切られる以前にも相手に対して不誠実とも取れる態度を示していた。例えば出自について、コリヌは即座にオズワルドに打ち明けなかった。また巧みにオズワルドを操り彼が結婚を口にするのを拒絶する、などの矛盾した態度を示した。

しかしながら、コリヌとドイツ・オペラの『ラ・サアルのニンフ』が共有したもっとも人間的な部分とは、上記の引用が示す通り両者が裏切った男性に対して復讐心を持った点だった。オズワルドは彼女の異母姉妹でブロンド髪、色白のルシルと結婚して娘ジュリエットを得た。彼らはコリヌに会うために、家族でイタリアを訪れた。自分の命が限られていることを悟ったコリヌは、オズワルドの了解を得て、最後に残された日々をこの黒髪の娘への教育に費やした。その理由とは、コリヌの死後も、オズワルドが娘を見るたびにコリヌとの過去を思い出さずにはいられないようにしむけることによって、オズワルドを辛い気持ちにさせるためだった。<sup>40</sup>

最後にドイツ・オペラ『ラ・サアルのニンフ』と小説『コリヌもしくはイタリア』の相違点についても指摘しておく。スタールは『ラ・サアルのニンフ』について、これが大衆劇の枠を超えるテーマ性を持つものであるにもかかわらず、変化に富んだ魔法のシーンを細心の工夫によって混在させた。それが結果的にすべての社会階層の見物人を楽しませることのできる大衆オペラとなった、と指摘している。<sup>41</sup> この指摘からスタールが大衆オペラの中にフェミニスト的要素を盛り込むことに抵抗感のないドイツ人観客の精神的寛容性を間接的に見抜いていることが理解できる。スタールは暗にドイツと比較した時イギリスやフランスでは家父長的な傾向がより強くジェンダーに対して非寛容であることを示唆した。

スタールは以上の批判的な視点から、『ラ・サールのニンフ』をもとに近代社会を生きる女性について小説化した。そしてそれを文字通りの妖精や魔法が登場するファンタジーではなく、より現実的な内容の政治小説に仕立て上げた。そこにはイタリアの独立、ナポレオンのヨーロッパ支配に対する抵抗、フランス革命の行方などに関する複数の政治的メッセージが込められていた。それらは言論統制の効いたナポレオン帝政下のヨーロッパにおいては、あいまいさを伴う小説という形式を取ったからこそ公に語ることのできる内容だった。

スタールは中世ドイツに由来する妖精の「魔法」をイタリア「観光」に置き換え「ドイツ喜劇」を「近代的な恋愛もしくは悲哀小説」に転換させた。『コリンヌもしくはイタリア』はドイツ・オペラのようにすべての社会階層ではなく、フランスやイギリスなどの市民社会の中で力を持ちつつあった中産階級を含めた教養人たちに限定された。

その結果『コリンヌもしくはイタリア』は19世紀初頭のヨーロッパの社会事情を反映した典型的なブルジョワ小説となったが、それは同時に単なるブルジョワ文学ではなかった。スタールは政治思想家として1789年以來のフランス革命期の10年間に古代人と近代人の峻別を図って独自の政治的自由主義思想を展開した。彼女はその後『コリンヌもしくはイタリア』にフェミニスト的視点を導入することによって自身も貢献する政治的自由主義思想に内在する近代家父長制に対して愛の成就という視点から鋭い異議申し立てを行った。それがこの小説が今日復活した理由である。

## 5. 結論

本論文は、スタールの小説『コリンヌまたはイタリア』に込められた神話的要素に着目しつつその現代性について考察した。

先行研究では、ジェラールやドメニキーノの絵画の影響下コリンヌを古代ローマのシュビラと同一視させる傾向が強い。しかしこの解釈によってコリンヌの美しい外見、神秘的な存在感、即興詩の才能などについて説明することはできても、近代市民社会において「特別な才能を持った女性は女性として幸せな結婚ができない」というこの小説の教訓的部分を説明することはできないことを指摘した。

特別な才能を持ったコリンヌの社会的立場にま

つわる内的葛藤を重視した時、コリンヌ像はスタール自身がドイツ・オペラ『ラ・サール・ニンフ』を通して知り得たドイツの民間伝承ローレライに由来した。しかしながらスタールは民間伝承を民間伝承として描くのではなくあくまでもオペラを通じて知り得た近代化されたローレライ像にこだわった。その根拠として本論文はスタールがオペラ鑑賞の後で取ったメモの一部がスタールの『ドイツについて』における第二部第26章の「喜劇」における「ラ・サール・ニンフ」に関するテキストの一部となったことを指摘した。そしてスタールがドイツ・オペラの「ラ・サール・ニンフ」像とコリンヌがともに「与えられた特別な才能と結婚」との間に同じような内的葛藤を持つという認識を持っていた点を何よりも重視したことを指摘した。

スタールのコリンヌ像はイタリアとドイツの要素を織り交ぜて誕生した。それはイタリアを象徴する美しい外観とあくまでも精神的自由を希求するドイツのロマン主義的要素を反映させた女性像だった。しかしスタールはストーリー展開の視点からはドイツ・オペラの『ラ・サールのニンフ』を重視し、中世ドイツに由来する水の妖精に関する民間伝承を道義的教訓が込められた近代ブルジョワ小説へと仕立て上げるとともに、この女性の葛藤を通じて近代市民社会に内包された家父長制度を批判した。

最後に本論文の考察から小説『コリンヌもしくはイタリア』が世紀転換期の神話の概念に新たな意味を付与したことが明らかになった。それは女性キャラクターにまつわる神話的要素とは単に一民族の精神的遺産を構成するものではなく、そこには近代市民社会に内包された女性の自由の否定を糾弾する役割が込められていた、というものである。スタールが小説に取り入れた「ラ・サールのニンフ」像とはナショナルな存在ではなく、ヨーロッパスケールで展開された政治的自由主義思想に位置付けられる普遍的でリベラルな存在だった。この点においてスタールは小説においても文学者ではなくあくまでも政治マインドを優先した女性フィロゾフとしての立場を重視した。その結果この小説は19世紀初頭と今日の社会を結ぶ接点となり、極めて近代的なインプリケーションを持つ神話と化した。



## 付記

本論文は2018年度の戦略個人研究費 No. S3023 による成果である。原文の翻訳は全て著者による。またこの論文を書くにあたって二人の査読者および一人の編集者から大変貴重な意見をいただくことができ、感謝の念に堪えません。

最後に大妻女子大学の戦略個人研究費によってイタリアを訪問した結果、小説『コリヌもしくはイタリア』についてより理解を深めることができた。この小説に内包されるイタリアの観光ガイドブック的側面について写真と文章を以下のサイトに掲載したのでよかったですらご覧ください。

<https://chinatsutakeda.com/>

## 引用文献

- [1] John Isbell, 'Introduction' to Madame de Staël, *Corinne, or Italy*, trans. and ed. by Sylvia Raphael, Oxford, Oxford University Press, 1998, vii.
- [2] Ibid. viii.
- [3] Stéphanie Tribouillard, *Le tombeau de Madame de Staël: Les discours de la postérité staélienne en France (1817-1850)*, Genève, Editions Slatkine, 2007, 915-918.
- [4] Simone Balayé, 'Préface', Mme de Staël, *Corinne, ou l'Italie*, Paris, Gallimard, 1985, 7.
- [5] フランスでは Simone Balayé アメリカでは Madelyn Gutwirth がスタール研究のパイオニアの役割を果たした。Simone Balayé, *Madame de Staël. Lumières et liberté*, Klincksieck, Paris, 1979. Madelyn Gutwirth, *Twilight of the Goddesses: Women and Representation in the French Revolutionary Era*, Rutgers University Press, 1992. 1789年から1994年のスタール研究の目録については以下を参照されたい。Pierre H. Dubé, *Bibliographie de la critique sur Madame de Staël: 1789-1994*, Droz, Geneva, 1998. またスタール研究の最新の研究動向については、フランスのスタール研究協会(La société des études staéliennes)の年次会報(le cahier Staélien)に詳しい。
- [6] Madame de Staël, *Corinne, ou l'Italie*, Paris, Editions féministes de Claudine Herrmann, 1979. Germaine de Staël, *Corinne, or Italy*, ed. and trans. By Avriel H. Goldberger, New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 1987.
- [7] スタール夫人, 『コリヌ: 美しきイタリアの物語』, 佐藤夏生訳, 国書刊行会, 東京, 1997. 同じく佐藤氏の『スタール夫人』はわかりやすく人物と思想を紹介している。佐藤夏生, 『スタール夫人』, 清水書院, 2005.
- [8] 詳細は Tribouillard, *Le Tombeau*, 32.
- [9] 本論文で数ある『コリヌもしくはイタリア』のバージョンの中から最新のフランス語版を採用する。Madame de Staël, *Œuvres complètes, série II Œuvres littéraires, tome III, Corinne ou l'Italie, texte établi, présenté et annoté par Simone Balayé*, Paris, Honoré Champion, 2000.
- [10] <https://dictionnaire.lerobert.com/definition/mythologie> (2020年6月30日)
- [11] これに田口武史, 『R・Z・ベッカーの民衆: 啓蒙運動: 近代フォルク像の源流』, 鳥影社ロゴス企画, 2014を参照されたい。
- [12] Simone Balayé, *Madame de Staël: Ecrire, Lutter, Vivre*, Geneva, Droz, 1994.
- [13] Simone Balayé, 'Du sens romanesque de quelques œuvres d'art dans Corinne', in Madame de Staël. *Ecrire, lutter, vivre*, 111-135. 小林亜実, 'コリヌあるいはスタール夫人のシビル: 『コリヌあるいはイタリア』におけるドメニキエーノのシビルをめぐって', 美術史論集, 14: 73-79, 2014. 村田京子, 「絵画・彫像で読み解く『コリヌ』の物語」, 女性学講演会, 18 (1), 2015-03, 30-69. その後論文は以下の著作におさめられた。村田京子, 『イメージで読み解くフランス文学: 近代小説とジェンダー (水声文庫)』, 「第1章 天才的な女性詩人の悲劇—スタール夫人『コリヌ』」, 水声社, 2019, 17-66. 以下本論文では村田氏の論文に準拠して注釈を施す。Jennifer Law-Sullivan, 'Civilizing the Sibyl: Staël's Corinne ou l'Italie', *French Forum*, vol.32, no. 1/2 (Winter/Spring 2007), 53-71. 工藤氏はシュビラとコリヌの関係について「イタリアの伝統」に従ったもの、とのみ説明している。工藤, 『評伝: スタール夫人と近代ヨーロッパ: フランス革命とナポレオン独裁を生き抜いた自由主義の母』, 東京大学出版会, 2016, 206.
- [14] Simone Balayé, 'préface' to Madame de Staël, *Corinne ou l'Italie*, Gallimard, Paris, 1985, 10.
- [15] Isbell, 'Introduction,' viii.
- [16] 'Elle était vêtue comme la Sibylle du Dominiquin, un schall des Indes tourné autour de sa tête, et ses cheveux du plus beau noir entremêlés avec ce schall; sa robe était blanche; une draperie bleue se rattachait au-dessous de son sein, et son costume était très pittoresque, sans s'écarter cependant assez des usages reçus, pour que l'on pût y trouver de l'affectation.' Staël. *Corinne*, 25. (Livre II Chapitre I) 村田, 「絵画」, 32.
- [17] Balayé, 'Du sens romanesque de quelques œuvres d'art dans Corinne,' in *Madame de Staël: Ecrire*, 114.

- [18]村田, 「絵画」, 33-34.
- [19]「信託を下す巫女は残酷な力に揺さぶられるのを感じています。何だかわからない無意識の力が天才を不幸に陥れます。天才は死すべき人の感覚では捉えきれぬ領域の音を聞きつけます。他の人々には道の感情の神秘に入り込み, その魂に収まりきれない一人の神を秘めることになるのです。」Ibid. 34-35. 古代ローマと関連するアントゥージアズムの解釈については Ibid.45.
- [20]Ibid.45.
- [21]古代ローマと関連するアントゥージアズムの解釈については村田, 「絵画」, 45. 佐藤, スタール夫人, 134-143.
- [22]「コリンヌは神との契約を破っていた。」村田, 「絵画」, 49.
- [23]Ibi. 60.
- [24]工藤, 評伝スタール夫人, 205.
- [25]Mme de Staël, *Mme de Staël and Politics, Literature and National Character*, trans. And ed. by Morroe Berger, 1964, Doubleday, 141-142.
- [26]この点については以下の論文に詳しい。Susan Tenenbaum, 'The Power to Corrupt: A Staëlian Perspective on the Fine Arts,' in *Passions: Sensibility, Society and the Sister Arts* ed. by Tiliboon Cuillé and Karyna Szmurlo, Backnell University Press, Lewisburg, 2013, 193-204.
- [27]R. Casillo, *The Empire of Stereotypes*.
- [28]L. Jaume, *L'individu effacé ou le paradoxe du libéralisme français*, Paris, Fayard, 1997, 42.
- [29]村田, 「絵画」, 40.から引用。Staël, *Corinne, Œuvres complètes*, 341-342.
- [30]村田, 「絵画」, 30. Simone Balayé, « Corinne, Histoire du roman », in *L'éclat et le silence*, 7-9. Balayé, *Les carnets*, 98-99.
- [31]「Hier, j'ai fait un nouveau plan de roman *en voyant une pièce d'imagination et de féerie tout à fait remarquable.*」Balayé, *Les carnets*, 97-98.
- [32]*Haunted Europe: Continental Connections in English-Language Gothic Writing, Film and New Media* ed. By Michael Newton and Evert Janvan Leeuwen, London, Routledge, 2020. Kari E.Lokke, 'Woman and Fame: Germaine de Staël and Regency Women Writers,' in *Keats-Shelley Journal*, vol. 55, *Women Writers of the British Regency Period*, 2006, 73-79.
- [33]キャロル・ローズ著, 松村一男編訳『世界の妖精・妖怪事典』原書房 2003年
- [34]Ibid. 94-95.
- [35]Madame de Staël, *De l'Allemagne*, vol.II, Paris, 1810, 268.
- [36]Ibid. 268.
- [37]Ibid. 268. ただし引用の中の ( ) については著者が加えた。
- [38]「une femme d'un charme si séducteur et si généralement admiré。」Madame de Staël, *Corinne*, 405.
- [39]Staël, *De l'Allemagne*, vol.II, 268-269.
- [40]Staël, *Corinne*, 517-521. これに加えて, コリンヌは即興詩を創作する力を失って死ぬった死ぬ間際に「自分を捨てた恩知らずに対して、もう一度、コリンヌこそがオズワルドを最も愛することのできた女性であり、そんな女性をオズワルドは死に追いやったことを理解させるために」オズワルドを招待して、自分が創作した最後の詩を別の女性に歌わせた。(傍点は著者による) Ibid. 521.
- [41]Madame de Staël, *De l'Allemagne*, 269.

---

**Abstract**

---

I reflect upon our contemporary feminist implications of Germaine de Staël's novel *Corinne or Italy* by focusing on its mythical characters. Previous studies have related Corinne, the novel's female protagonist, to the classic figure of Sibyl in ancient Rome, an interpretation reinforced by painters such as Il Domenichino and François Gérard. However, even though this analysis can account for Corinne's beautiful appearance, mythical presence, and distinguished talent as an improviser, I argue that it neglects one key element of the novel—that a woman of special talent cannot be happy in modern society because it allocates women to the strictly prescribed social roles of a good wife and mother.

Staël was actually inspired to write this novel after seeing a very popular German opera entitled *Saal River Nymph*. In this paper, I will demonstrate that Corinne is actually comparable to the main character of *Saal River Nymph* in many respects. I will analyze Staël's reflection on German comedy in *On Germany*, her own famous literary and cultural criticism of Germany. In particular, I will draw attention to the fact that Staël found that this particular version of *Saal River Nymph* was in possession of not only magics but also the superior mind while cynically noting that the man who left the superior *Saal River Nymph* and ended up with an ordinary woman without specific talent was inevitable, since the couple were compatible in terms of intelligence and moral superiority. Staël then replaced this story in a nineteenth-century bourgeois novel and denounced the patriarchal system inherent in modern civil society. Thus, Staël's opinion of *Saal River Nymph* does not have a medieval origin but remains very modern. For this reason, Staël's *Corinne or Italy* successfully contrasts German romanticism in an Italian context. In addition, Staël focuses on the female protagonist's inner dilemma about her quest for freedom as an artist rather than on her outer appearance.

Finally, this finding leads to the conclusion that, at the turn of the century, mythical characters did not exclusively serve the purpose of nationhood or *volk*. Female mythical characters such as the *Saal River Nymph* represented a universal feminist protest against a male-dominated society, as well as a male-centered parliamentary system and public opinion. As such, these characters serve as a bridge to our contemporary political values.

---

(受付日：2020年1月25日，受理日：2020年7月16日)

**武田 千夏 (たけだ ちなつ)**

現職：大妻女子大学比較文化学部教授

ロンドン大学ロイヤルホロウェー校大学院史学専攻博士，Ph.D in European history

専門はフランスを中心としたヨーロッパ近代史，政治思想史

主な著書 *Mme de Staël and Political Liberalism in France* (2018, Palgrave)